

討論メモ

「表現の自由はどこまで許されるか」

令和 2年 11月 17日

1. 11月は表題について、森田から配布済みのレジメに沿って、フランス、アメリカ、日本などの例を引きながら、表現の自由が難しい課題に直面している状況について説明があった。

表現の自由がゆがめられている背景については、金融資本による大手マスコミや教育界の支配が進んでいる、中国による情報戦が各国に浸透している、弱者、少数者などの救済を謳う政治活動に利用されている、ネット空間が大手プラットフォームに支配されていることなどが指摘された。

2. 続いて出席者7名による意見交換に移り、下記のような意見が出された。

- ・ムハンマドの風刺画をめぐる殺人事件に関連して、マクロン大統領の”表現の自由“を擁護する発言にはびっくりした。

- ・フランス人にとって、”表現の自由”は、フランス革命にさかのぼる重要な文化財であり、歴史であり、日本人の感覚と違うのかもしれない。

- ・風刺画も貴重な文化ととらえられており、社会的ステイタスが高いようだ。

- ・風刺画をめぐる殺された教師はどんな授業をしていたのだろうか。日本ではほとんど授業内容が報道されていないようだが興味がある。

- ・日本でもかつては風刺のきいた政治漫画があったが最近は見かけないようだ。

- ・イスラム教は他の宗教を認めず、紛争が起きやすいのではないか。

- ・自分の中東駐在経験からすると、イスラム教は温和な教えである。

- ・トルコで制作された番組で、かつてのトルコの名君の裁きや王宮の暮らしが紹介されているが、大変に魅力的である。

- ・仏国と違い、英国は多様性を重んじているようだ。

- ・しかし、英国も移民を嫌ってEUから離脱している。

- ・ドイツでも移民とのトラブルは多発しているが、報道が抑えられていると、ドイツ在住の日本人作家が言っている。

・産経を購読している。朝日、毎日図書館で読んだりするが、産経とは正反対で概ね予測できる記事になっている。

・イザヤベンダさんの書によると、ユダヤでは全員一致は認められないようだ。多様性がなくなったり、個人が熱狂的に支持されたりする状況は危険だ。

・日本では中国の情報戦が効いて、中国の暗部は報道されない。ウイグル・チベット・モンゴルなどの民族弾圧についてはほとんど沈黙している。

・日本人の関心が低いせいではないか。

・日頃、人権尊重を叫んでいる人たちは何をしているのか。

・米国ではGAFによるネット支配が問題になってきている。GAFの好まない意見は削除するという実質的な検閲が行われていて、上院で質疑されている。

・GAFを分割すべきという意見も強まっている。

・炎上を防ぐために極端な意見を削除するのは管理上やむを得ないのではないか。

・ヘイトスピーチ法は罰則がないのがおかしい、条例で罰則を設ける県が出てきたのはよいことだ。

・ヘイトスピーチ法は逆差別ではないのか。

・国境なき記者団によると、日本の報道の自由度は世界で66番目、記者クラブの存在がガクンになっている。

・筑波大に留学している米国人学生に、日本に来た理由を尋ねると、“日本には言論の自由があるから”と答えるそうだ。日本の大学で教鞭を取る米人教授も“日本は言論の自由にとっての希望の星だ”と述べている。

・日本が希望の星とは驚くが、それだけ欧米における言論の自由は圧迫されているということだ。

・日本人は、欧米は言論の自由の先進国だと思っているが、実態は違うのかもしれない。

・スマホなどの普及で、子供が大人の世界を自由に覗けるようになっている。教育がますます重要になる。

・格差が対立を生み出している。

・日本の格差も広がっている。

・教育格差も生まれている。

- ・ 相対的な貧困が問題。他者との比較で不満が出てくる。
 - ・ 底辺の人たちの発言が過激になるのはやむを得ない。
-
- ・ ドイツ人に工場見学をさせ、グループ競争での改善活動を見せたところ、ドイツでは格差を生むので導入できないとの反応だった。
 - ・ 年功序列や終身雇用が敬遠され成果主義が採用されつつある。会社の和は保たれるのか、懸念される。
-
- ・ 米国大統領選における大手マスコミの偏向報道は非常識で見苦しい。
 - ・ しかし、トランプ大統領がフェイクニュースを作り出している。
 - ・ いや、トランプ大統領は自由な言論空間を取り戻すために、大手マスコミと戦っている。
 - ・ 記者会見で、選挙結果についてトランプ大統領が不正に言及したら、メディアが一斉に放送を打ち切ったのは英断である。
 - ・ いや、とんでもない暴挙だ。メディアの一方的で傲慢な体質をよく表している。

以上